

「銅板折鶴」を 職人たちの希望の翼に

今年3月にオープンしたカンデオホテルズ長崎のロビーには、平和への願いを込めた美しいオブジェが飾られている。クリスタルに光り輝く名勝「眼鏡橋」の上で舞い踊る、約100羽の銅板折鶴。その1羽1羽には、職人の妥協なき磨き抜かれた技と、アートコンセプトとは別の熱い想いも折り込まれていた。



普通の折鶴とは異なる特殊な折り方を工夫。「難しいのは、銅板に完全左右対象の折り線を引くこと。わずかなブレが出ても、美しく折り上げることはできない」



0.2mmの純銅板と、0.15mmの真鍮板を使用。「真鍮の微妙な硬さが歪みを生むため、0.05mm薄くした。これは実際にやってみないとわからない誤差です」

銅板折鶴を製作しているのは、屋根板金工事のスペシャリストの株式会社ウチノ板金だ。なぜ折鶴を作りはじめたのだろうか。「北海道を旅した時、現地の方が作った銅板折鶴を見つけました。作り方が気になり分解すると、もっとうまくいった方が良いと思える点をいろいろ思いついてしまっただけ。そこから職人魂に火が付いてしまったのです」と内野会長は笑う。

アイデアを凝らし完成度が高まると、ご子息の内野代表取締役は、和國商店のブランドでネット販売を開始する。

「私たち職人は、真夏の60℃を超える屋根の上でも作業しなければなりません。だから年を重ねると引退の文字が脳裏をよぎ

りはじめます。でも折鶴なら、屋根を降りても熟練の技を活かせるはず。この商品価値を世の中に認めてもらえれば、うちの社員はもちろん、板金業界の職人みんなが、自信と誇り、将来への希望を持って働いていきます」と内野代表取締役。

プレゼント用のパッケージも特注し、一般消費者向けにも広く販売。最近では、海外からの注文も増え、お二人はより手応えを感じている。

「大切なのは、ブランドとしての品質を磨き続けることです。どうすればより良くなるか、つねに意見を出し合い、試行錯誤を続けています」

いまでは銅板折鶴を見て、入社したいとやってくる若い人も。全社員の夢を乗せて羽ばたく折鶴の銅の翼は、美しく力強く輝いて見えた。

1羽1羽に注ぐ職人のこだわり
その価値をブランディングでPR



株式会社ウチノ板金
取締役会長
内野 國春氏



株式会社ウチノ板金
代表取締役
内野 友和氏



WAKUNI
SHOTEN

★ホームページ★

<https://www.wakuni.shop>